

本論文は、縄文時代以降の日本列島各地でおこなわれてきた、銛を用いた狩猟・漁撈を研究対象とした考古学的な研究である。銛猟において最も重要な機能を担う「銛頭」という道具に注目し、その製作・使用技術を詳細に復元した上で地域間の広範な比較をおこない、先史―歴史時代の日本列島内で広域的かつダイナミックに展開されていた技術交渉を、精密かつ実証的な方法で解明しようと試みた労作となっている。

銛頭は特徴的な形態の骨角器として戦前から注目を集め、広域的な視点から型式編年と系統関係の解明が試みられてきた。しかしながら各研究者間で分類の視点や基準、用語が共有されておらず、また分類基準にも技術論的な裏付けを欠いた一貫性の無いものが散見されたため、議論が深化・蓄積されず、点と点を結びつけるような強引かつ印象論的な系統関係の指摘が多く認められる傾向にあった。高橋健氏はこれらの問題を根本から解決すべく、①学史を総括して研究が混乱した原因を明らかにする一方で、それらに替わる体系的な分類基準を整備した。②そしてそのような明瞭な分類基準をもとに縄文・弥生（続縄文）・古墳の各時代の銛頭の地域編年と系統関係を整理し、弥生時代に全国規模で同時発生的に生じる型式変化が、従来言われているような単純な伝播系統論では説明できず、地域毎に複雑な伝播・受容のプロセスが認められることを具体的に指摘した。③さらに北海道のオホーツク文化の銛頭型式編年に対しては技術論的な視点を積極的に取り入れ、合理的・実証的な説明を加えつつ編年を確立した。本論文の研究成果は以上の三点に集約されるが、ここで提起されている合理的かつ体系的な分類基準は今後の研究のスタンダードとなることは確実である。このような厳密な視点を維持しながら広域的な比較検討を行った研究はこれまでに例がなく、その意味で本論文は博士学位授与に見合う高い研究成果を有していると評価できる。

本論文中では銛猟の社会的・経済的役割にも言及されているが、高橋氏自らも今後の課題として認めているとおり、それらの側面に関する検討にはまだ不十分な点がある。銛頭が多く出土している日本列島の北方地域、特にオホーツク海や北太平洋地域の資料との比較検討も本論文には盛り込まれおらず、その点も課題として残っている。しかしこれらの点は本論文の学術的価値を損なうものではないし、高橋氏がすでに実践している本論文第1部の民族考古学的研究や、本論文で確立した手法はこれらの課題を近い将来に解決できるだけのポテンシャルを十分に秘めているといえる。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと認定する。